

---

# Half Dragon

聖なる写真

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Half Dragon

### 【NZード】

N3257F

### 【作者名】

聖なる写真

### 【あらすじ】

異世界カランドィア 様々な人種が生きるこの世界での小さな田舎町…そこで起こった凶悪事件…はたしてアイラとリリスは町の平和を守れるのか…?「あれ? そんな話だつたっけ?」言つた

(前書き)

なむつファンタジー企画小説です  
企画参加もこれで2回目..  
お世話になります

カラントニア  
異世界

この世界には様々な人種がいる

ハーフウルフ  
半狼、  
ハーフフィッシュ  
半魚、  
ハーフドッグ  
半犬、  
ハーフキャット  
半猫、  
……

その中でももっとも恐れられていた人種

その名は  
……

ハーフドラゴン  
半龍

1人の少女が男を追つてい  
る  
少女は半狼で、名をアイラといった  
ハーフウルフ

一方逃げているこの男

「ゴロウ」という名のこの男は普通の人だ  
さつき近くの店で食い逃げをし、 警官であるアイラに追われてい  
るのだ

たらふく食べたためか、ゴロウの足は速い  
だが、  
半狼<sup>ハーフウルフ</sup>であるアイラの足の方がはるかに速い

あつとこづ間にゴロウは追いつかれた

そして、

「狼爪」  
ウルフクロー

ハーフワルフ  
半狼は狼のような持久力、速さ、耳に加え  
身体の一部、爪、牙が異様に固くなっている

彼女が繰り出した一閃はゴロウの背中を切り裂き、  
ゴロウはバラ  
ンスを崩し、倒れる

「…」

倒れたところに

…え？

“待機していた”警官たちが“一斉”に襲いかかつた

“一斉”に襲いかかった警官たちに思わず突っ込みが揃うアイラと  
「ゴロウだつた

## 酒場

昼夜に起こつた“奇跡的な”逮捕劇  
アイラはこれにぶちギレていた

「」、「」、ヴィリアンは非常に平和で警官たちも退屈していた

「」、「」、訓練は怠らないところがすばらしいが、それでもヒマなものばかりだ

そのため、たかが食い逃げ、スリ程度ですら全員が出動すると、いつ摩訶不思議な現象がおこっていた

平和といえば平和

退屈といえば退屈

アイラはこんな日々に退屈していた

「そもそもなんでワタシは「」にいるんだろう……」

「そんなにイヤならこの街から出ていけば？」

「うう……それもイヤだ……」

アイラと酒を飲み交わしながら話しあっている小柄な少女は彼女の親友リリス

彼女は普通の人間で、人種学者だ

人種学者というのはそれぞれの人種の能力の差や、特徴を調べる職業だ

無論、それぞれの弱点を熟知しているためアイラは彼女に喧嘩で勝つたことがない

「もういい……もう今日は呑むぞ……！」

「いや、明日も仕事があるんじや……？」

「気にすんな……！お代わりい……！」

「へい……毎度……！」

ちなみに彼女は閉店まで飲み続けた

「ボクもう帰つていい?」  
「ムリ!!」

哀れ、リリス

翌朝

「知らないよ、ボクは今日は休みだからゆつくりできるけど、

君は自業自得だろ」

「なんとかならないの!?」

- ならない

焦って走り出すアイラに呆れ果てるリリス  
ちなみに、リリスも走っている

「なんとかしてみ！」  
ハーフウルフ

「ごめん。私が全面的に悪かった。」

そして、謝るアイラ

弱い

二

《…リ…！　聞け…か！？　リリ…！！》

「ああ！？」

警官に支給されている安物の無線機から聞いたのは警察署の署長の顔

電波状況が悪いのか、 雑音がとにかく悪い、 聞き取りにくい

『……交差……暴れ……いる……お前……来るな……！』

『……』

ちよつと待てえ！？！？『

警察の出番のはずなのに、 署長から下されたのは“待機”命令  
これにはアイラだけではなくリリスも突っ込んだ  
そのあまりの大きさに周りの人々が一斉に振り返るほど

「署長！？ なんですか！？」

安物の無線機に怒鳴り散らすアイラ  
普通は強敵だからなどの理由があるだろう  
リリスは突っ込んだあとにそう連想した

だが、

『久……大手……んだ！！……いか！……“絶対に”く……！……』

通信終了

『…………』

しばし、無言になる2人

とても聞き取りにくかつたが、おそらく  
“久々の大手柄なんだ！！……いか！……絶対に来るな！！……”と言  
いたかったのだろう

「……アイラどうする？」

肩をワナワナと振るわせるアイラに恐る恐る尋ねるリリス

「…………」

「まだ無言のアイラ  
見れば握りしめた拳から血が流れている

触らぬ神になんじやら

リスはいまだ身体を振るわせているアイラから6歩ほど離れる

## 爆発5秒前

4

3

2

1

彼女の雄叫びはここ、  
ヴィリアンに響きわたつた

ひとりしきり署長の暴言をenburgまくつたあと、リリスはアイラに感る感の聞いてみた

「……………で？」

「あ、そう……」無理！ オムロン！！！ 交差点に行く！！！

リリスはもうなにも言わなかつた

こういう状態の彼女にはもうなにを言つてもムダだからだ  
走り出したアイラとは逆の方向へ、リリスは駆け出した  
ゼイゼイと息を切らせながら、こんなことなりもつと運動しようと  
べきだった、と後悔しながらもリリスはある大きな建物へと入つ  
ていった

そこは彼女が勤める研究所だった

そこから様子を見ようと思つたのである

「あ！ リリス助教授！ 大変です！！」  
「どうしたの！？ 危険性の高い薬品が流出した！？」

助手の慌てた声にリリスの心も焦つた  
研究所には毒性や酸性の高い薬品も多い  
それがたとえ一つでも流出すれば、バイオハザードものになるも  
のも少なくはない

「違うんです！！ あれを！」

「……」

「え？」

助手が指示した窓の外、交差点には次々と薙ぎ倒されていく屈  
強な警官たち

そして、その中心にいた人種

額には鬼のような角

背中には「ウモツ」のような翼

そして、左頬や左腕などといじめられて変化していく魚のような  
ウロコ

その姿を見たリリスは手を驚きと恐怖に振るわせながらその種族名  
を呟いた

「.....」

ハーフドラゴン  
半龍……！……！」

「どうしますか！？」

恐怖にパニックになる助手たち

「所長は！？ 教授たちは！？」

「全員休暇をとっています！！」

「……………！」

そう、 それは

今この場で半龍ハーフドラゴンにもつとも詳しい人物は

リリストークになる

「どうしますか！？」

「……………アレ”を20枚持つてきて

「……………ア、 “アレ”ですか！？」

助手の慌てふためいた姿とは別に急に冷静さを取り戻したりリス  
バタバタと駆けていく助手たちを背中で見送りながら交差点を見つ  
めるリリス

そこに現れた人物

「…………アイラ…………!?」

「助教授!! 持つてきました!!」

驚くリリスに息を切らせながら近づいてきた助手

「ハイ！ ライ麦パン20グ」「ちがああああああああああああああ  
あああああああう！！！」「え！？」大好物ですよね！？」

助手のあまりのボケボケっぷりに、思わず殴りそうになつたりり  
スだつた

アイラは田の前の光景を一瞬疑つた  
鍛え上げられた警官たちが全員倒れているのだ

「……ハゲ署長……？」

「……普通に署長でいいから……」

「……新手か」

声の主は謎の人種  
半龍ハーフドラゴンなのが人種学者ではないアイラにはそんなことは分かるはず  
もない

「何者だ？ お前……？」

「俺か？ 俺は……」

半龍ハーフドラゴンのガイガ様だあ！！

「……………！」

ガイガの自己紹介に驚いたように目を開くアイラ  
それに満足したようにガイガが畳み掛ける

「ふん、 おじけついで 「狼爪ウルフクロ！！」 え…？」

ガイガの戦闘体型が整う前にアイラは硬質化した爪で斬りかかる

ハーフウルフ  
半狼の爪は鋼の剣並みに硬い

だが、その一閃はガイガのウロコが生えた腕に阻まれた

鋼同士がぶつかり合うような鋭い音が響く

「……なつ……!?」

「フハハハハ！ ムダムダムダムダア……俺の身体はあらゆる攻撃を無効化するのだ！！」  
「くそお……<sup>ウルフフアング</sup>狼牙……！」

勢いよくかぶりついたがアイラの牙はウロコにじどくことなく、ガイガの高笑いが響く

「……ムダだというのが分からんのかあ……！」

ガイガの拳がアイラのアゴに命中した  
2、3回転したあと受け身をとりつつ倒れこんだアイラは起き上がるがると同時に口から血を吐く  
そこには折れた歯が混じっていた

「……くそつ……」

「フン、これが半龍<sup>ハーフドラゴン</sup>と他の下等種との違いだ」

口から血を滴れつつ意外にも気丈に立ち上がるアイラに対し、それをハッタリだと思つたガイガは嘲笑う

だが、アイラが立ち上がったのはハッタリでもなんでもない  
ハーフウルフ  
半狼はシブトイ

半人種は普通の人間と比べて全体的な能力が高い  
その中で半狼の耐久力は半龍に匹敵するとも言われている  
だが、半龍は伝説に近い存在だ

その差は開いているのはさつき見たとうりだ

「…しょせんは下等種…

「俺の敵ではない！！」

「…それはどうかな？」

謎の声と共に、赤い液体が入った試験管がガイガめがけて投げつけられる

その試験管はガイガにぶつかると、一瞬で砕け、赤い液体を撒き散らす

赤い液体はガイガのウロコを溶かしはじめる

苦痛に顔をしかめるガイガ

そう、赤い液体の正体は“酸”だ

森羅万象、あらゆる生命体の弱点である酸  
いかに半龍の皮膚が堅固を誇ろうとも、酸の化学反応の前にはただ体を溶かすのみ  
だが、半龍にはもっと別の弱点があるのだが……

アイラは酸を投げつけた人物を見据え、その名を叫んだ

「リリス！！」

「まつたく：大丈夫？」

呆れたようにアイテを心配するリリス

「しぶとさだけなら天下一品!!」

「あ、なに？ その言じてない事は？」 ああ？

「いや、信じてこながれ。……」

L

2人の会話に割り込む、ガイガ  
さつきから忘れられていたのだ

## さつきの叫び声に2人の反応

「あ、いたの」

冷酷すぎる

決してできない」

## リリスに突進するガイガ

リリスは懐から一本の試験管を取り出すとガイガに投げつける

「ふん！ そんなものが喰らひでよ」思つてゐる……「！？」

避けようとするガイガ

だが、リリスは懐からあるものを取り出した

「行け！！ “ヴァンリング”！！」

流れ出たのは金色のチャクラム

昔々、古代文明があつた

古代文明に暮らす彼らは圧倒的な軍事力を持つていた  
そして、人の精神に反応して動く特殊な金属があつた  
リリスが取り出したのもその一種だ

金色のチャクラムは美しい流線を描きながらガイガに、いや、  
試験管目掛けて突撃する

そして、叩き割る

ヴァンリングはガイガに一つも当たることなく、再びリリスの元  
に戻っていく

そして、ガイガは

試験管の中身 半透明な液体のほとんどをその身に浴びていた  
対して異変は起こらないようだ

今は

「ふ、ふはははははははは...」

「こんな液体など通用しない！！」

「3...」

2...

1...

「ん？ なにを...！？」

ガイガの足が凍りつく

腕も

手も

腰も

さつき液体がかかつたところが凍りついていく

「 も… もとも… ！ … なにを… ！ ？」

ガイガの口から白い息がもれる

そんなガイガの姿を見て、満足そうに言い返すリリス

「ハーフダラゴン半龍の最大の弱点……それは…

「 寒さに弱い」と

「 …… 寒さ…？」

「 ……？」

アイラが聞き返す

リリスは肩をすくめながら答えた

「 森羅万象さまざまなモノには必ず弱点がある  
犬の弱点がカカオのように」

ちなみに豆知識だが、犬はチョコレートを食べると死ぬ  
チョコレートの中に含まれているカカオが犬にとつて有毒だからだ

「 そして、ハーフダラゴン半龍の弱点は寒さ

さつき投げたのは瞬間冷却剤、強力なね」

「 …ふ！ ふざけるなあああああああああああああああ  
あ！！ 」

叫び、暴れるガイガだが、少しづつその身体は凍りついていく  
アイラはしつかりとした足取りで、ガイガの前に立つと拳を握り  
しめる

「……お前の……敗けだあ！！！」

### 頸への一撃

その一撃の威力は地面に凍りついてくつたはずのガイガの身体を浮かすほど強力だつた

### そのままダウン

ガイガは完全に目を回していく、 しばらく起きそつにない

アイラは懐から手錠を取り出すと、 ガイガの手にかける

「……えーと……とりあえず“公務執行妨害・傷害罪”の現行犯で逮捕する！」

カシャンと乾いた音が響いた

エアポート

そこではちょうど魔石の1種、飛行石を利用した空飛ぶ船……飛行船は大量の風をおこしながら着陸した  
次々と飛行船から降りていく乗客たち  
その中にメガネをかけた長身の男性がいた

エアポートにいたリリスはその人物を見つけると走りだし、  
飛び付く

「あなた！！」

「ただいま、リリス！」

イチヤイチヤイチヤイチヤイチヤ

「……あの～」

リリスとともにエアポートに来て いたアイラがリリスに尋ねた

「なに?」

… も、大体分かるけど…」

「あ、だ、  
旦那あ！？！？！？」  
妻がお世話になりました」  
妻あ！？！？

“あんぐり”という擬音の代表に推薦したくなるほど呆然としているアイラに対してもイチャイチャしだすバカ夫婦

「リ、リリス！？ 結婚してたの！？」  
「してないって言った？」

.....

あのあと、ガイガは警察に無事、連行されていった  
アイラはその活躍が認められ、今から中央に研修に行くことになる  
..... 実際は研修に行くはずだった奴が、今回の事件で全治5ヶ月  
の重傷を負つたためなのだ

リリスも“実は今日、会いたい人が帰つてくる”と言つので、  
ついてきたのだ

相変わらずイチャイチャしているバカ夫婦とは出来る限り他人のふ  
りをしながら、アイラは自分が乗る飛行船を待つた  
側には必要最低限なモノがつまつたトランクケースがある

「...また、戻つてこれるよな...」  
「あれ？ 出ていきたって言つてなかつた？」  
「うつ.....」

リリスがアイラの揚げ足をとつてからかう  
なにげにしつかり夫に抱きついている

と、

『8番ポートに中央<sup>セントラル</sup>行き、

飛行船が

』

「お、 じゃあな」

「うん、 じゃあね」

2人は手を振り合い、 逆方向へと歩き出す

2度と会えないかもしだれない

やがては忘れられていくかもしだれない

けど、

焦ることはない

2人の“未来”はまだ始まつたばかりなのだから

}  
Fin  
{

(後書き)

他のなろうファンタジー企画小説や俺の連載小説“神様と私”もよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3257f/>

---

Half Dragon

2011年1月26日14時19分発行